



山陽スピリット ニュース No.10

2018(平成30)年2月26日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

「子どもに生きる生き方」を 門田界隈に無形遺産として 残した人々

山陽学園大学・山陽学園短期大学
副学長 濱田 栄夫

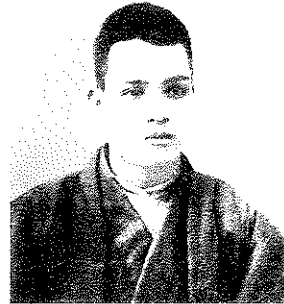
1894(明治27)年7月箱根山上、芦ノ湖の畔において、第六回キリスト教夏期学校が開催された。その時の講演者のひとりに、当時34歳の内村鑑三がいた。「後世への最大遺物」と題する彼の講演は、参集した多くの青年に感銘を与え、速記録として残されたが、現在は岩波文庫の中の一冊として収録されているので読まれている方も少なくないのではなかろうか。その講演の中で、彼は、我々は何を後世へ残せるかと問い掛け、お金、事業、思想、文学作品、教育活動などと具体的に例示しながら、誰にもできる後世への最大遺物は、勇ましい高尚なる生涯という生き方ではないかと指摘し、その生き方を説明して「この世の中は悲嘆の世の中でなくして、歓喜の世の中であるという考えをわれわれの生涯に実行して、その生涯を世の中への贈り物としてこの世を去るということ」だと述べている。

彼がこの講演をした頃、岡山の門田界隈で生涯をかける生き方をすでに実践し始めていた三人の青年がいた。年齢順に言えば、石井十次(1865-1914)、アリス・ペティー・アダムス(1866-1937)、上代淑(1871-1959)の三人であるが、内村が講演した明治27年当時、石井十次は29歳で、門田にある三友寺の一部を借りて岡山孤児院教育会(後に岡山孤児院と改称)を立ち上げて7年目を迎えたところであった。(従って本年は岡山孤児院創立131周年にあたる)アリス・ペティー・アダムスは28歳で、岡山で伝道活動に従事していた従兄ペティーのすすめで来日し

てから3年目を迎えたところで、岡山最大のスラム地区花畑の子どもたちを自宅に招いたりしながら、地区改善の試みに着手していた。上代淑は23歳で、明治22年に山陽英和女学校に着任し、翌年の23年から日曜学校としての旭東講義所(後に旭東日曜学校に改称)で幼児たちと関わり始めていた。ただし上代淑は、明治26年から30年にかけて4年間アメリカのマウント・ホリヨーク大学に留学しているの、その間は門田界隈の活動から離れていたが、帰国と同時に元の活動に復帰している。

この三人は、内村鑑三の講演がなされる以前に、岡山の門田界隈で子どもに関わる活動を開始し「子どもに生きる生き方」をそれぞれのやり方で、しかも三人が協力しあい、励ましあいながら、生涯をかけて追求し続けていた。石井十次の岡山孤児院は、明治20年7月貧児前原定一と孤児二人の3名を救済することから始まったが、次第に活動が拡大され、明治39年に東北地方が気象不順で極度の不作に陥った際には3ヶ月間に700人以上の貧児の救済を引き受け、全体の孤貧児数が1,200名にまでなっている。

アリス・ペティー・アダムスの活動は、明治24年、スラム地区の子どもたちを自宅に招いてクリスマス会を開催したことに始まったが、20年を経過した折に、それまでの保育園、小学校、日曜学校、裁縫所、施療院の活動を「岡山博愛会」の総称のもとに置き、アダムスが会長に就任した。70歳となり宣教師の定



1891(明治24)年頃の石井十次



来朝当時のアダムス(1891年25歳)

年を迎えた昭和11年9月に、アダムスは岡山を去るが、帰国後1年たらずで世を去っている。岡山博愛会は、岡山博愛会病院やアダムスホームを中心に現在も継続されているが、アダムスが来日した年の暮れに、地区の子どもたちを招待してクリスマス会を開いた日をもって創立の日としている。上代淑は、山陽英和女学校に着任した翌年の明治23年から、旭東日曜学校の一教師として幼児クラスの担当を開始するが、大正時代中期からは日曜学校全体の運営責任をまかされるようになり、第二次大戦中に岡山空襲で、日曜学校の建物が全焼した後も、山陽高等女学校の一室を借り受けて、昭和34年に世を去るまで、日曜学校の活動は山陽女子中学・高等学校での指導と並行して継続された。日曜学校に通った生徒たちの中で、成人になって岡山を離れていたが、やがて岡山に戻ってきたことを契機として、上代淑の下で旭東日曜学校の教師として協力した那須衛一や上月あやもいる。

上代の日曜学校での活動は、多くの子どもたちと一緒に活動した人々の心の中に深く刻印された。

戦前旭東日曜学校生徒であった水野徹雄は、軍隊で東京俘虜収容所

の開設にかかわった関係で戦後戦犯容疑者として巢鴨監獄で不安な日々を送っていた当時、上代が書いてくれた弁護の手紙が裁判で弁護側証言資料として提出され、軽量な判決に落ち着いたことを切々と書き残している。

三人の「子どもに生きる生き方」は、すでに三人の生前から同時代の青少年や市民に多大な影響を及ぼした。三人の活動の直接的な後継者ばかりでなく、留岡幸助のような感化事業の推進者(北海道北見に家庭学校を創設したが、平成27年に100周年を迎えた)、倉敷の保育園「若竹の園」を開設した大原寿恵子(大原孫三郎夫人)、画家の児島虎次郎(明治39年に岡山孤児院の理念と生活の様子を「情の庭」と題する作品で具象化した)、作曲家岡野貞一(「故郷」「おぼろ月夜」「紅葉」「春の小川」「春が来た」などの作曲)、山田耕柝(「この道」「赤とんぼ」「ペチカ」など作曲)らにも影響を及ぼした。岡野貞一と山田耕柝は人生の多感な少年時代に彼ら三人の活動の場近くで生活したが、門田界隈での三人の「子どもに生きる生き方」に強く鼓舞されたと言ってよいだろう。内村鑑三は『後世への最大遺物』のなかで「人は何が残せるか」と問い、「生き方」は取り組み方によって誰もが残せる最大遺物になると述べているが、門田界隈に刻まれている三人の生き方は、まさしく語り伝えられるべき無形遺産といっても過言ではない。



若き日の上代淑(26歳)



岡山を去る前日、多久安徳知事は喜代子夫人と共に訪問される(1936.9.16)前列三人のうち左からアダムス、上代淑